

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 附属小学校・教諭

氏 名 五十嵐 徳也

研究期間 平成30年度

研究プロジェクトの名称	体験や実物をもとに思考し、歴史から自らの価値をつくり出す児童をはぐくむ実践研究
研究プロジェクトの概要	<p>本研究では、小学校社会科の歴史学習において、実感を伴った知識をもとに思考し、自らの歴史観をつくり出す子どもをはぐくむために、「もの」や「食」を中心とした体験的な歴史学習を積み重ねながら子どもの活動を構想・展開することの有効性を明らかにすることを目的とした。</p> <p>小学校における歴史学習では、国宝、重要文化財に指定されているものや世界遺産に登録されているもの、または人物を中心としながら進めていくことがきわめて多い。本研究では、その時代に食べられていた「食」やそれにまつわる「もの」を中核とし、それをつくったり味わったりする活動を行いながら、子どもが歴史の中に登場する人々の営みに目を向けていくような活動を構想・展開した。再現しやすい「もの」や「食」を中核に学習を進めていく提案をすることで、社会科の授業づくりの視点を多様にするができる。</p>
研究 成 果 の 概 要 ※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。	<p>「食」や「もの」を中核とした活動を積み重ねていくことで、子どもは歴史観をミクロとマクロの双方の視点で見つめることが増えた。土器や勾玉を作った子どもは、古代に生活をしてきた人々の営みそのものに目を向けた。これらはミクロ的な視点であり、マクロ的な視点でまとめている教科書や資料集の記述には無い視点といえる。</p> <p>歴史学習のスタートでこうした視点を得た子どもは、人物学習ですら、生の人物像としてとらえるようになった。また、歴史学習の一番の山場としてとらえている近代における戦争の学習では、軍都高田の形成を中心に活動を展開した。その学習においても、子どもは当時の町全体、町に住む一人の市民、当時から見た今現在の社会など、様々な視点で歴史的事象から今の自分を見つめた。</p> <p>歴史的事象から今の自分の暮らしを見つめる子ども。このような姿こそ、21世紀を生き抜く子どもの能力であり、社会科の歴史学習にて重点的にはぐくむ力であると考えられる。</p>
研究 成 果 の 発 表 状 況	○上越市教育コラボ2018「学び愛フェスタ」にて口頭発表を行った。
学校現場や授業への研究成果の還元について	○『社会科教育における思考力・実践力の育成を目指す教育実践学の探究』（2019.3月）にて実践事例を執筆し、上越地域の学校に配付した。 ○『初等社会科教育研究』（風間書房.2019）にて実践事例を執筆した。

【提出期限】平成31年3月29日（金）正午：厳守